

令和6年度 小平市立小平第三小学校 学校評価報告書

学校教育目標		○考える子（よく聞き、よく考え、よく判断し、自ら行動できる子） ◎やさしい子（互いの立場や相手のよさを認め合う思いやりのある子） ○元気な子（健康で、生き生きと活動できる子）									
目指す学校像(ビジョン)											
【目指す学校像】		学校・地域・家庭が互いに育て合い、子ども一人一人の笑顔あふれる学校									
【目指す児童・生徒像】		子どもが生き生きと力いっぱい活動する学校									
【目指す教員像】		教職員が互いに高め合い、協働する学校									
前年度までの学校経営上の成果と課題											
ICTを活用し、児童の学力の向上を図ることができた。地域や保護者の方への発信も上手いきき、肯定的なアンケート結果が出た。 いじめへの対策が保護者に発信できていない。情報を発信していくとともにアンケートの項目も評価しやすいように改善していく。											
	具体的方策	第1回評価		成果・課題・対策	第2回評価		学校関係者評価	成果・課題・次年度以降の対策			
		取組指標	成果指標		取組指標	成果指標					
学力向上	コラボノートやデジタル教科書、デジタルドリルなどを日常的に活用した授業を行い、児童の学習意欲を向上させる。	3	3	デジタル教材を積極的に活用したうえで、ノートやワークシートなども併用し、指導している。特にデジタルドリルは、ベーシックドリル等の結果から苦手な単元の反復学習に利用している。	3	4	地域保護者アンケートで85%の方が肯定的な意見が見られた。授業を参観するとICTを活用し児童が積極的に授業をしている様子が見られた。学校の意図が保護者に理解されるように発信方法を考えていきたい。	コラボノートやデジタル教科書の効果的な活用ができた。学年間、学級間でも指導方法の情報共有し、多くの児童が分かる授業を行うことができた。引き続き、OJTなどを通して、学習指導力をブラッシュアップしていく。			
	OJT研修会を16時半から15分間で学期に3回程度設定する。若手が学びたいと考えている内容の研修も計画する。	3	4	教職員からニーズを聞き出し、教科等の様々なOJTを行った。若手教員だけでなく、校内全体として学びあう風土に繋がった。	4	4		OJTを通して教科の専門性の向上をはかることができた。また、教職員間の情報交換がすすみ、学びがあった。			
健全育成	生活指導タ会や特別支援情報共有会で全職員が配慮の必要な児童の情報を共有し、全児童が学校に安心してこれるようにする。	3	4	アレルギー対応や特別支援等の状況を共有することで、チーム学校として児童を支援する体制につながった。生活指導タ会に事故報告等も行い、再発防止に努めた。	4	4	成果指標に1がついたのは、わからないと答えている人が多いからなので、先生たちの取組が伝わるようにしていく工夫が必要である。	日ごろからいじめは起こりうるものと考え、全教職員が未然防止に努めたり、素早い情報共有と初期対応することができた。また、教職員間での情報共有もスムーズにできた。			
	学校いじめ防止基本方針に基づき、担任1人で抱え込まず、多くの教職員や外部の人材と連携し、いじめ解消を目指し対策をとる。	3	1	いじめへの対策や未然防止について「わからない」と回答した保護者が約半数であった。今年度から配属された三小サポーターの説明など、学校としてどのようにいじめに対応しているかを説明していく必要がある。	4	1		前期に続き約半数の回答が「わからない」である。学校の取組が発信できていないことが課題である。今後は、学校の取組が信頼されるように情報を発信していく。			
健康づくり	縄跳び週間やドッジボール週間などで体を動かす楽しさを実感できる機会を提供し、継続した運動習慣につながるように指導する。	3	4	前期はドッジボール週間や児童集会を通して運動の機会を提供することができた。後期は縄跳び・マラソン週間の期間を長く設定し、より多くの運動習慣につながるようにする。	3	3	学校アンケートに「家庭は」と家庭を主語にする取組へのアンケートがあることで、学校と家庭と地域がともに育てていることが意識できて良かった。	ドッジボール週間など、全校的な取り組みの機会をきっかけに普段外で遊ばない児童についても運動に親しむことができた。一方、身体を動かすことに前向きになれない児童も一定数いるので、引き続き学校全体、学年、学級など、様々な単位の集団で取り組みを継続していく必要がある。			
	保健指導や日頃の学級活動を通して、睡眠時間や食生活の大切さを指導していく。	4	3	学期に一度、身体計測の前に養護教諭による保健指導を行っている。睡眠時間や食生活については家庭と連携して進めていく必要性を感じている教員がいた。ほけんだよりや給食だよりで家庭へも周知していく。	4	4		規則正しい生活を送ることができている。引き続き、指導を継続していく。			
コミュニケーション	教員に地域行事の予定を周知する。またや外部人材の情報を提供し、活用しやすいようにする。	3	3	休日の地域行事にも、教員が積極的に参加することができた。地域人材の活用として、家庭科を中心に学習補助をお願いする体制ができた。	3	3	多くの先生方に地域や青少年のお祭りに参加していただきありがたい。無理なく学校をお手伝いするボランティアグループができ、家庭科や総合的な学習の時間にゲストティチャーや安全面の見守りで効果的に活用することができた。	引き続き「地域の中の学校」であることを広め教育活動に参画してもらえるようにする。			
	ホームページに発信するだけでなく、月に一度は、スクールメールで地域連携の活動を紹介する。	3	2	まだ不十分だと感じている保護者・地域の方が多い。引き続きホームページやスクールメールで紹介していくことで、充実を目指す。	3	3		後期もホームページやスクールメールを通して発信することができた。学校から地域行事がある際は積極的に情報発信していく。			
働き方改善・業務改善	業務の仕分けを実施し、他の主体への対応の要請、教師以外の担い手の確保、業務のスクラップ・アンド・ビルドにより負担を軽減する。	3	2	業務改善に関する具体的方策について話し合っておらず、教員の意識改革に至っていない。市内学校の状況も確認しながら、三小としての業務改善の方向性を示す。	3	4	来年度は、所見の回数を2回にすることで教員の負担を軽減する案を実行したい。保護者の理解が得られるように年度当初から説明していく。	エデュケーションアシスタントやスクールサポートスタッフなどと協力し、業務の仕分けができた。引き続き業務改善を図っていく。			
	教科間の関連性を意識した年間学習計画を利用し、業務改善を図る。	3	3	概ね達成しているが、学年間によって成果に差がある。研修等を通してカリキュラムマネジメントについて教員に周知を図る必要がある。	3	3		教科間の関連性を意識した年間指導計画を活用し、効果的な指導、業務改善に役立った。			